

マリンスキーの 『白鳥の湖』

ユリヤ・ステパノワとザンダー・パリッシュが揃って主役デビューを飾った記念すべき公演。マイク・ディクソンがペテルブルクからお伝えします。

ステパノワとパリッシュはともに、彗星のように現れた若手スターだ。前者は『ラ・バヤデール』のガムザッティ、マリンスキー・バレエで唯一のイギリス人団員である後者は『アポロ』と『ジゼル』のアルブレヒトに今シーズン初めて挑み、成功を取めたばかり。二人が初めて主演する『白鳥の湖』は、ロシア内外から大きな関心を集めていた。ここ数年、筆者は同団のリハーサルを繰り返し見学する幸運に恵まれてきたが、今回のパリッシュとコール・ド・バレエとの最初のリハーサルには、じつはかなり驚かされた。コーチのイーゴリ・ペトロフが傍らで見守るなか、パリッシュは様々に陣形を変えながら動く白鳥の群れの間を進むのだが、位置取りに迷うと彼女たちが小声で指示を出すのだ。これこそがマリンスキー流、すなわち、慌てず騒がず、動きの動機付けを問いただすこともせず、ひたすら仕事を進めていくという、プロの態度というべきだろう。

当日の舞台では、第一幕は完全にジークフリート王子を踊るパリッシュのものだった。威厳に満ちたジェスチャーを自然な感情を込めて行い、贈られた簪（いしゆみ）を手にする場面では、家庭教師や道化を脇に従えて、子供のように楽しそうな様子を見せる。パ・ド・トロワは、女性的でしなやかなエレナ・エフセーエワ、鋭くクリアな動きのナジェージダ・ゴンチャル、均整のとれた体型とすぐれた音楽性のダビッド・ザレエイエフ。美しいスタイルが徹底し抑制の効いたそれぞれのソロに続き、コーダは大きく盛り上がった。道化はワシーリー・トカチェンコ、皆にちょっかいを出すいたずら者を明るい笑顔で魅力的に演じ、周囲をいらつかせるどころか魅了せずにはおかない。端正かつ高速でのピルエット・ア・ラ・スゴンドには、盛大な拍手が沸き起こった。そして「乾杯の踊り」でのパリッシュは、周囲と同じステップであっても誰よりも美しく堂々としており、まるで、ひとりだけ高価な辞書から引いてきた語彙で語っているかのよう。続く内省的なソロでは長い手脚が造形するアラベスクが魅力的で、本来は身体的な均整美にすぎないはずのものの上に、永遠を描き出していた。

湖畔の場面では、イリヤ・クズネツォフが力強く、獲物を狙う目に隙のない悪魔ロットバルトを演じた。彼の手にかかるとこの役は特別なものになり、すべてのしぐさに意味が宿る。最終幕ではパートナーリングにも卓越したところを見せていたが、私にとっては観るたびに印象の深まるすぐれたアーティストだ。よく鍛えられたコール・ド・バレエは欧米での諸演出に比べて動きが速く、緊迫したこの場の雰囲気をよく伝えている。



マリンスキー『白鳥の湖』でのユリア・ステパノワとザンダー・パリッシュ Photo: Emma Kauldhar

そしてオデットの最初の登場場面でのステパノワは、初役にしてすでに完成されたバレリーナのオーラを放っていた。全身のラインは息を呑むほど抒情的で、腕は表現力に富み美しい。パリッシュとのグラン・アダージュでは、意味深長さと緊張が混じり合った心の結びつきを感じさせたが、パートナーリングが遠慮がちに見える部分も。観客はとかく、ここよりも「黒鳥のパ・ド・ドゥ」の方が組んで踊るのが難しいのではと想像しがちだが、じつはそうではない。この版のようにテンポがひじょうに遅い場合は特にそうなのだ。だが今回のふたりは自然に共鳴しており、上記の問題も、初役の緊張がどこかにあった（客席からはそうは見えなかったが）からかもしれない。

舞踏会の場面では、「スペインの踊り」（エレナ・バジェノワ、エカテリーナ・ミハイロフツェワ、トロフィム・マラーノフ、アレクサンドル・ベロボロドフ）がしなやかで様式美を感じさせ、「ナポリの踊り」（アリーナ・ヴァレンツェワとニキータ・リャシュチェンコ）は喜びに溢れる。アナスタシア・ザクリンスカヤとキリル・レオンティエフの率いる「チャルダッシュ」では、後半のスピードに興奮させられた。ステパノワのオディールは魅惑的で主張が強く、高度な技巧を駆使したパ・ド・ドゥの振付に臆することなく挑み、32回のフェットも落ち着いて一気に回りきった。パリッシュはここでもみごとで、ソロに含まれるあらゆる要素を完璧にこなしていた。とくにコーダでのクベ・ジュテでのマネージュは、十全のコントロールとパの完成度の高さが一体となって、古典的かつ勇壮だった。

最終幕の湖畔でのステパノワは絶好調で、前の幕に比べてもバランスはより長く、表現力はより豊かだった。バレリーナとしての彼女の潜在能力が、一気に表に現れた感がある。主役二人の相性も上々。パリッシュはバレエ団の他のバレリーナとも共演してきたが、ステパノワとは将来にわたり、重要なパートナーシップを育む可能性を感じさせた。（訳：長野由紀）